

陳舜臣さんを語る会通信

NO.22

Oct. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年10月20日

現地踏査と文献を駆使した労作『茶の話 茶事遍路』

『茶事遍路』の初出は朝日新聞連載（1987年11月2日～88年4月7日）です。連載中から大きな反応があり、陳舜臣さんは、「いささか意外であった」と述懐されています。1988年4月、朝日新聞社から単行本として発行されました。現地踏査と文献を駆使した労作で、読売文学賞を受賞しています。文庫版では『茶の話 茶事遍路』（朝日文芸文庫）と改題されています。ここでは、文庫版を使用しました。（編集委員 橘雄三）

執筆動機 朝日文芸文庫「あとがき」から引用

茶というものは、無事
平穩の時代も、非常緊急
のときも、さし出がまし
くない存在であることに
変わりがなかった。それ
こそが茶の魅力ではない
かとおもう。関心をもち
れにくいそんな茶に、私
が関心をもちはじめたの
は、二十数年前、小説
『阿片戦争』をかけたとき
であった。アジアの近代
の幕をあけたこの戦争
の原因は茶にあった。具
体的にいえば、茶が主因
になる中国からの入超に
悩んだイギリスが、アヘ
ンという見返りの輸出品
を開発し、中国がそれを
拒もうとして起こった戦
争である。この戦争を理
解するには、戦争の名称
となったアヘンのほかに、
アヘンの登場を促した茶
を理解しなければならな
い。



（朝日文芸文庫表紙）

よって、私は茶が理解で
きたと言いつける勇氣はな
いし、べつに新しい発見
があったわけでもない。
それにもかかわらず、メ
モの整理のような形の文
章を発表する気になった。
それは、日本では茶道が
盛んでありながら、日本
に伝わる以前の茶の歴史
が、あまり知られていな
いようにおもったからだ
である。また日中両国の相
互理解、あるいは学術的
な比較論といった問題に、
素材を提供する意味で、
断片的な文章でもなか
の役に立つのではないか、
という気持ちもあった。

一九八八年春 陳舜臣

『茶の話 茶事遍路』要約(1)

《1. 『茶経』を著わした陸羽》

布目潮風ほか編訳『中国の茶書』（東洋文庫 289）
では、陸羽の没年を804年、77歳としている。

出身地竟陵は現在の湖北省天門県。捨て子だったという。智積禪師に拾われる。容貌はさえず、吃音であったが雄弁。「吃の雄弁は迫力があつたにちがいない」。仏よりも儒を学びたかった。便所掃除、瓦はこび、牧牛など、智積の愛のむちに逃げ出し、ドサまわりの芝居の一座に入る。芝居の台本を書く。

18歳のころ、竟陵の太守李齐物（りせいぶつ）の目に留まり学問の機会を与えられる。李齐物左遷の6年後、竟陵はまた左遷者崔国輔（さいこくほ）を迎える。陸羽は崔国輔と文人としてのつきあいをする。

安禄山の乱おこる（755年）。

『茶経』執筆はこの乱の直後か？『茶経』は「茶は南方の嘉木なり」ではじまる。「陸羽はこの著作

によって、茶の神様にされてしまった。」

「茶」という文字は陸羽のころから用いられ始めたか？それ以前は、「荼」、「茗」などの文字が使われていた。

理想の人間像は精行儉徳之人（品行端正で節儉の美德を持つ人）。茶はそのような人にふさわしい飲み物というのが『茶経』の大前提。

安禄山の乱の影響で竟陵を離れ太湖の南、呉興（湖州）へ。

陸羽は自分を取り立ててくれた人として李齐物と崔国輔をあげ、友人として釈皎然（しゃくこうぜん）をあげている。



陸羽像

『茶の話 茶事遍路』要約(2)

《 2. 陸羽と顔真卿の出会い 》

陸羽の湖州移住後のことです。

湖州に新しい刺史が任命された。安祿山の乱のとき、勤皇の義軍を挙げ、また書家としても名声の高かった顔真卿(709-785)である。彼は窮乏とまではいえないが、生活の基礎がしっかりしていない地方の文人隠士たちに、固定収入がはいるように配慮した。

陸羽もこれに参画した。

湖州には足かけ五年在任したが、波瀾の多い顔真卿の生涯で、湖州刺史時代は、最も幸せな時期であった。

たといえる。陸羽、皎然、張志和といった文人たちと、たのしい会合をもつことができた。

顔真卿は、信条・理想を一切曲げず、剛直（心が正しく気質が強い）で、政治上、敵が多く、権力者に疎んじられ、何度も左遷の憂き目にあった。理想と現実のギャップを茶でうめようとした？

また、書では、当時流行の王羲之流の流麗な書法に反発し、力強さと穏やかさを兼ね備えた独特の書法を確立した。

最後は、反臣の淮西節度使李希烈に対する慰諭（なぐさめさとす）の特使を押し付けられ、現地で李に殺された。

『茶の話 茶事遍路』には、16の見出しがあります。前頁から本頁にかけて、その内、最初の4つ、「南方の嘉木」「陸羽の生い立ち」「俚徳の人」「湖州刺史顔真卿」を纏めて要約しました。あと12は、以下、見出し毎に記述し、また、いくつか関係画像を添えました。



雲南省昆明で、お茶を飲みに町に出る陳さん
1999年(『中国ライブラリー27 茶事遍路』口
絵写真より)。1999年というと、『桃源郷』
取材時と思われます。

抹茶興亡

陳舜臣さんは、雲南省西双版纳傣族自治州を訪れたとき、茶樹から枝ごと折り取ったばかりの葉を、ざっと火にあぶったあと、それを熱湯につっこむという、豪快な茶の出し方に出会い、人間が茶の味をおぼえた初期の飲み方はこんなだったろうとおっしゃっている。陸羽は『茶経』に飲茶の種類として、餠(そ)茶、散茶、末茶、餅茶の四つを挙げている。陸羽の時代、唐代は末茶が主流であったが、現代の中国ではどこにもない。日本では末茶(抹茶)が現在まで残っている。中国で末茶がすたれた最大の原因は、明の洪武年間に、固形茶の進貢をやめて、葉茶のままに改めたことにあるという…。宋代は、竜鳳茶、小竜団、瑞雲翔竜、御苑玉芽、万寿竜芽、無比寿芽、新竜園勝雪と、限りなく上質の茶を追い求めた。陳さんは、そういう姿勢が亡国につながったと言われる。その他、日本へ茶を伝えた永忠、栄西にも言及。
■宋の仁宗と小竜団

名茶をもとめて

陸羽、湖北省竟陵から浙江省湖州へ移住。湖州には献上茶である顧渚茶(こしょちゃ)の産地があった。陸羽は湖州を拠点にして、名茶をもとめて、江南地方をあちこち行動したと思われる。陸羽より後の時代、北宋期に貢茶の中心地となる福建省北部の茶について、陸羽は「未詳であり、ときどきその茶を入手できるが、その味はきわめて佳である」としるしている。また、知識として、蜀に名茶が産し、この地を含め、中国西南部が茶樹の原産地らしいと気づいていたようだ。陳舜臣さんは1980年、87年、99年の3度、四川・雲南を旅しておられる

茶樹王	1987年4月、陳舜臣さん、茶摘みシーズンの西双版纳へ「茶樹王」を見に行く
境会亭	陸羽が太湖南岸、湖州に移住したころ、太湖西岸南岸一帯は茶の産地で、特に、前述、顧渚茶も含め、陽羨茶と呼ばれる茶がすばらしかった。陽羨茶は、陸羽の進言により、朝廷への進貢品となった。ところで、この陽羨茶の産地は常州と湖州にまたがってとれたので、両州の長官が進貢の共同責任者となった。毎年、三月、茶摘みのシーズンになると、両州の役人は、両州の境界の顧渚山上に集まり、製茶や運送の監督にあたった。そのために、そこに、「境会亭」が建てられた

現在の湖州市、常州市→



『茶の話 茶事遍路』要約(3)

茶馬と茶塩	①唐代、その版図に良い軍馬はいなかった。現在の青海あたりにいたチベット人が唐に馬を供給した。唐では、チベット人に、絹を売って馬を買った。一方、チベットは茶産地の四川、雲南に近いので、中国本土よりいくらか遅れて喫茶の風習に染まったと思われる。宋代になると、チベット人との交易は、絹と馬から茶と馬に変わった。②南宋最大の詩人陸游は、提挙福建常平茶塩公事、提挙江南西路常平茶塩公事を歴任した。常平とは物価を安定させることである。茶も塩も重要物資であるので、その物価安定が必須だったのだ
栄西のいたところ	栄西は1187-91、二度目入宋。陳舜臣さんは、この時期の中国の茶について、陸游から話を始める。陸游は、詩人としての名声は高かったが、官界でのスタートが遅かったうえ、前述、江南西路常平茶塩公事のと、官有米の無断放出で解任されたりして官位は低かった。陳舜臣さんは陸游が好きである。もちろん、『中国詩人伝』にも描いている。■杭州郊外、梅を妻とし、鶴を子として、一生独身で過ごした和靖先生こと林逋の茶を詠んだ詩をとりあげる
武夷三十六峰	武夷山は「九曲」「三十六峰」と称される。陸羽の時代、福建茶はそれほど知られていなかった。宋代になって、献上茶の筆頭となり、皇室御用の茶を栽培する北苑が設けられた。更に南宋になって北苑が衰微し、武夷がこれに代わった。朱熹のつくった学校「武夷精舍」が第五曲の隠屏峰の麓にあった。1980年4月、陳舜臣さん武夷へ。左の画像のような体験をされたのです。■大紅袍、「岩の上には、何の変哲もなさそうな茶樹が三本生えていた」。■范仲淹の「闘茶歌」
鉄観音	半発酵の茶を総称して「烏竜茶」と呼ぶ。福建省安溪の烏竜茶の代表が「鉄観音」。武夷代表の水仙は鶯々、安溪代表の鉄観音は紅娘
竜井	中国の緑茶の代表は、浙江省杭州市近辺の「竜井」。西湖の西南に竜井村があり、そのあたりの山地が産地。普通「西湖竜井」と総称される。天目山は雲霧が多く、そこに産する茶は「雲霧茶」として名高い。■広西桂平の西山茶
松蘿山周辺	イギリスの植物学者ロバート・フォーチュンは中国最高の緑茶の産地として安徽省の松蘿山周辺をあげている。松蘿山西方の祁門、更に西南、江西省に入つてすぐの浮梁は唐代から、茶の集散地で、茶商が各地からやってきた。祁門が輸出紅茶の最高級品となるのは、19世紀末である。■白居易の長い七言古詩「琵琶行」の2句、「商人重利軽別離 前月浮梁買茶去」
茶は西へ	マルコ・ポーロが、茶を知ったヨーロッパ人の最初期の一人であることはまず間違いない。また、17世紀はじめ、ヨーロッパに茶をもたらしたのはオランダで、日本の緑茶だった。ところが、茶貿易はしだいにイギリスが主導権を取るようになり、中国の茶が主役となっていった
茶につながるもの	茶がイギリス社会に与えた影響、アメリカ社会に与えた影響に言及。南宋の「末茶」を日本に伝えたのは、鎌倉期の栄西で、明の「煎茶」を伝えたのは、江戸初期の隠元である。隠元が建てた黄檗山の僧から、煎茶道の始祖といわれる売茶翁があらわれ、煎茶の精神は唐の盧仝の「茶歌」にあるとした。■1773年、ボストン茶会事件。■1840-42アヘン戦争



「琵琶行」
橋本関雪

白居易による同名の七言古詩の一場面を描いたもの。琵琶を弾くのは、もと長安の娼妓。琵琶に秀で華やかな世を送っていたが、やがて、容色衰え、商人の妻となったが、いまは夫にも顧みられない身となっている(左端)。その右は白居易。長い詩の2句、「商人重利軽別離 前月浮梁買茶去」からみて、商人は茶商であつたらしい。江西省浮梁は有名な茶の集散地。

宋の仁宗がこよなく愛した名茶「小竜団」

《中国ドラマ『開封府』と『茶の話 茶事遍路』》

中国ドラマ、『開封府—北宋を包む青い天一』にはまっています。全58話で、いま、40話あたりまできています。北宋の仁宗の時代、頭脳明晰、清廉潔白、公平無私な青年官僚包拯（実在の人物。通称包青天。副題はこの名からきています）が数々の難事件を解決していくというストーリーです。包青天は、中国では、子供から老人まで、あらゆる世代に知られた人物です。時代、扱う事件は違いますが、人気からいうと、大岡越前といったところです。私利私欲を追う官僚の多いなかで、包青天が唯一人、心を許せるのが范仲淹でした。



蘇州駅前広場のでっかい范仲淹像。台の字は、「先天下之憂而憂 後天下之樂而樂」
東京都と岡山県にある日本庭園「後樂園」の語源。
なお、蘇州は范仲淹の故郷。（編集委員撮影）

次は、仁宗と名茶「小竜団」です。

宋の蔡襄に『茶録』という著作があります。欧陽脩が書いた『茶録』の後序について、『茶の話 茶事遍路』は、こう記述しています。

仁宗は「小竜団」をこよなく愛し、輔政宰相の臣といえどもこれを下賜しなかったという。ただ一度、中書省と樞密院（宋代はこれを二府と称した。政治の最高機関である）のそれぞれ長官、次官四人に、一府に一個下賜した。二府八人の重臣にたった二個というのは、いかにも珍重愛惜したというかんじである。

一つの小竜団を四つに分けたことになる。一人あたりはきわめて小さなものになったであろう。下賜された八人は、誰一人これを碾いて飲もうとしなかった。彼らの家宝になったのである。賓客があれば、うやうやしく取り出して、それを見せるだけなのだ。「伝翫」したとあるが、これは手から手に渡して、順々に鑑賞することにほかならない。



右はドラマ『開封府』の一場面
茶を飲む仁宗
銘柄は「小竜団」？

ドラマ登場人物の仁宗、范仲淹の名は、『茶の話 茶事遍路』にも出てきます。まず、范仲淹の詩です。『茶の話 茶事遍路』から引用します。

「先憂後樂」の名言で知られる北宋の名臣范仲淹（989-1052）の「鬪茶歌」にも、

溪辺の奇茗 天下に冠たり
武夷の仙人 古より栽う

の句がある。

江蘇省連雲港の銘茶「雲山雲霧」

『茶の話 茶事遍路』から引用します。

天目山は雲霧が多く、そこに産する茶は「雲霧茶」として名高い。だが、雲霧茶の名称は各地にあるようで、廬山にもおなじ名の茶があって、私も買ったことがある。

「雲霧茶」は私（橘）も飲んだことがあります。右の写真は、連雲港の大学にいたとき、学生から、「家に遊びに来て」と誘われて行った田舎の風景です。写真の日付は、2006.01.15となっています。茶畑が続いてい



ます。真冬と思えないのどかな光景です。

そして、叔母さんが働いている製茶廠へ連れて行ってくれ、土産にもらったのが「雲山雲霧」でした。このお茶の味は忘れられません。

